

人格化する国家と国家化する感動
 — 『感動中国』の中の意識形態と日常実践—
 馬嵐 (MA Lan, ま・らん) *

ポスト近代において、多元化、グローバル化の荒波の中で、人々が面する外部環境と内面世界とは非常に複雑化し、このような境遇においていかに失われた精神的拠り所を求めるか、いかに基本的な価値体系を新たに打ち立て、いかに民族や国家への帰属感とアイデンティティを育て強固なものにするのかは、極めて切迫かつ重要なことであるように見える。時代の変化に伴って、国家意識形態の表現の道筋や言説もまた変化しており、上からの説教と重要理論についての説明は、すでに民衆の実践参加動員には十分に有効ではない。旗を振ったり太鼓を打ち鳴らしたり、理論や路線を振りかざす厳しい批判も、より柔軟で迂遠な方法へと日々とって代わられ、国家も表舞台から幕の裏へと「隠退」してしまっている。

現代社会において、マスメディア、特にテレビは国家イデオロギーと族群文化を創り出す重任を担っている(李朝陽、2010)。国家は常にこの中立的に見える媒体を通して、自分の意思を表し、民心を獲得し、権力の存在と運用に正当性を与え、さらに、その土台を固める。とりわけ、いまはやりの儀式やセレモニーなどの形式を利用して、テレビ番組で式典を放映する。それはマスメディアと社会生活とを更に深く関らせ、今までのマスメディアにおいてイデオロギーを国家が直接的に主導するというイメージを変化させた。また同時に、国家イデオロギーの伝播ルーツを増やし、伝播の効率性を向上させてきた。本報告は、2002年にCCTV(中国の国営テレビ局)が製作した番組『感動中国』を実践例として、その中の言語表現実践や、意味の生産モデルおよび社会的アイデンティティの構造を読み解き、民族国家[†]がいかに式典の形式を利用・媒介にして人々の価値観を形作るかを示し、現代国家政権の新時代における宣伝方法と教化の道筋を明らかにする。

一、政治儀礼の中の国家の言説

「あなたはすでに長いこと感動させられていないのか？ある人が言うには、長い間感動させられていない心は、長い間水を得てない花のようなものだ。」これは2002年第一期『感動中国』の前口上である。当時中国のもっとも主流のマスメディアはこうした「主旋律」の中で、新たな受賞式の番組を始めた。この始まりの表現の中には次のような認識が含まれている。すなわち、感動とは完全な人格や美しい心に欠かせないものであり、日々失われてしまう貴重なものであるという認識である。これは予め「逸脱状態」の個人と社会—認知の離散、道徳の欠損、核心的価値体系の断片化—を想定している。感動ができず、感動もさせられづらい社会状況の中では、人々を感動させ、人々をどういうわけか感動するように形作り、その上「感動」を核心として普適性価値体系を構築する。「感動」というものはもともとときわめて個人的な体験である。司会者が番組の中で挙げた十歳の少女の「ある日の放課後、

* 1983年生まれ、女性。南京大学社会学院博士課程、江蘇省社会科学院助理研究員。

[†] 日本では nation state などの訳語として「国民国家」が一般化している一方で、national state に「国民国家」という訳語をあて、nation state には「民族国家」という訳語をあてる場合も見られる。原文で「民族国家」という表記をしていることと、中国政府が「中華民族」という概念によって民族概念と国民概念を重ね合わせようと試みていることから、「国民国家」とは訳さずに「民族国家」のままとした。

普段より授業が一時間延びただけで、学校を出たら、おじいちゃんが寒い風の中ずっと待っていて、それを見たら涙が出てきた」という類のものである。しかし、大衆的メディアが構築する公共の時空の助けを借りて、このような個人的感情は「共同の場」が実現されるので、外部から形成される可能性を備えるのである。

『感動中国』は終始一貫して儀式行為と儀式言語を用い、形式的構造においても完全な儀式性の特徴や儀式の存在と運用、往々にしてシンボルや記号と政治権力との不可分の関係性が見られる（陳蘊倩、2008）。ギアツ(Clifford Geertz)の言う通り、シンボル、式典と国家的な劇の形式は政治の現実化の一つの方法で、権力願望の実現の過程の中に用いる動員手段である(ギアツ、1999)。したがって、メディアの式典はまた「政治儀式」あるいは「国家儀式」となることができ、国家の表象となる。『感動中国』はまさにこうした国家表象の政治儀式で、政治的な意義、価値観及び社会感情の通達が目的で、さらに理想の国民を作り上げようと図るのである。これは民族国家の力が社会に浸透するための重要な方法である。

1. 儀式の時間：『感動中国』の放送される時間は大体、初十（旧暦の1月10日）前後である。時期の選択にもそれなりの意味がある。春節祝いと休日が終わったばかりで、人々が再び仕事に戻り、すべてが日常に戻る時期である。この時期において、昨年の重大事件を整理し、模範的人物を表彰することは、過去についての総括であると同時に、人々の新しい一年の思想と行動の方法のために指標を樹立して、その感動を新しい一年の仕事の中に持ち込むことである。元旦（新暦の新年）ではなく春節（旧暦の新年、中国では正月休み）期間が選ばれるのは、中国人にとって、春節に付随する文化的意味は元旦よりもはるかに大きく、人々は旧暦新年をますます生活上の出来事や記憶・言説の時期とみなす傾向にあるからである。これが大衆メディアを通して現われる政治儀式が人々の日常生活との間に出来る限りの親和性を保持し、都合よく受け止められている。

2. 形式構造：『感動中国』はすでに固定的な規格化された表現構造を形成しており、儀式過程は四つの部分から成り立っている。すなわち、人物事跡の紹介、表彰を受けた人物の身辺の人間のコメント、顕彰の言葉、栄誉の授与である。VTRの数分の時間の中で充実した情報を提供しようとし、その重点は表彰される人物の功績と事跡を示すことと、観衆の頭の中にひとつの想像上の英雄像を構築することにある。そして、表彰者あるいは関連する人物の本人出演を行い、「想像の個人」と「イメージの同席」の重合を実現する。本人出演のパートでは、重点は事業功績から個人の努力を述べることにへと移り、表彰者の生活者としての一面が映し出される。引き続き、司会者が表彰の言葉を読み上げ、その人物の具体的な事柄を巨視的かつ精神的に高く掲げる。最後は表彰で、英雄的人物の最終的な「戴冠」を完成させる。

3. 国家言説：『感動中国』が公共性メディアとして出来事を報道する過程において、たとえその年度人物（番組で表彰される人）の選択においても、またその年度人物を「国家偶像」にする過程においても、国家言説がすべて中心的な役割を担っている。選出された人物や出来事は基本的に広大な叙事詩の範疇に属し、民族国家価値体系の中の核心に置かれるのであり、以下の種類に分類することが出来る。(1)優秀な共産党員の代表や、党の優れた幹部であり、清廉で人民への奉仕のために心血を注ぐ人物。(2)自分の職業や研究分野で際立って優れており、民族と国家のために栄誉を勝ち取った人物。(3)個人の力で社会の公平と正義を維持するために、また人類生存の環境を改善するために多大な貢献をした人物。(4)危険を顧

みず、他者を救い、利他主義的な精神を表した人物。その人物の身分において、専門の学者、経済人、政治家、軍人や警察官、スポーツや芸能スターは基本的な分類で、すでに固定化されたカテゴリーであり、彼らはみな民族国家のエリート層に属する。その年度のテーマにおいて、その年度ごとの幅広い影響力のあった重大事件やシンボリックな人物はみな当然のことながら選出される。例えば 2008 年度は、国家的な重大事件が比較的が多い年で、年度テーマは「南方冰雪災害」、「汶川地震」、「オリンピック「神舟 7 号」という四つの重大事件に偏り、11 人の年度人物の中 9 人はこの四つのテーマから選ばれた人物であり、81%の比率に達した。これまでの回の中で最も国家的なテーマにより表象される人物が選ばれた(莫繼巖、2012)。ゆえに、その年度人物の選択は、国家イメージの人格化過程なのである。ただし、いったん選定されると、人物イメージを国家に向けて記号化する努力がなされる。表彰される人物ごとの表彰の言葉には国家の記号により個人事跡と民族国家の関連性が注入あるいは直接的に表われた。例えば中央財經大学の研究員・劉姝威氏は「中国の株式市場を一日も早く正常な軌道に乗せることを主張し、中国経済の発展を促した」とされた。バスケット選手の姚明氏は「強豪の多い国家的なスポーツ分野で、自分のポジションを確立し、中国人の誇りになった」とされた。宇宙飛行士の楊利偉氏は「中華民族の宇宙進出の夢を背負って、中国の宇宙開発成功の一步を象徴した」とされた。香港の俳優ジャッキー・チェン氏は「国際の映画界で中国映画人の魅力をアピールし、世界が中国文化を理解するための窓を開いた」とされた。陸上競技選手の劉翔氏は「加速度的に発展している民族を象徴している」とされた。37 年間約束を守り続ける陳健氏は「一度取り交わした約束を墨守することは、人間の基盤を支えるもので、これは個人においても、また民族にとっても同じである」とされた。ブルーカラーで専門家の孔祥瑞氏は「150 項目の革新、国家に 8,000 万元の利益をもたらし、労働者の成功の模範である」とされた。また、中国原水爆の父・銭学森氏は「国家を重んじ、家を軽んず、中華民族知識人の模範である」とされた。これら表彰の言葉は個人の行為のために国家と民族の集団的価値を賦与することを通じて、ミクロな個人からマクロな局面への転換を完成させ、個人の特色を薄らげると同時に一種の集団的イメージを構築した。個人としての年度人物は社会的役割が凝縮された、国家イメージの人格化の結果である。表彰儀式は過去一年間の中国社会及び中国人に対する「集団戴冠」を行っているのである。このメディアの式典は実質的に国家がその場で有効的に行った政治儀式である。

4. 中心と周縁：儀式はその実施と同時に、事前にそれに参加する人々及びその影響を受ける人々の範囲を設定している。儀式の過程で、「我々」という認識を強化し、「自他」の境界を明瞭にし、求心力を増す。毎年、年明けに行われる中国の最主流のメディアを通じた政治儀式である『感動中国』は時間的空間的に人々の関心を集め、意味上の中心的な概念を構築した。同時に、中心もまた周縁を入れて、さらなる包摂性を示している。周縁とはすでに地理的な辺境を指す言葉として用いられているが、経済的文化的に劣勢な地区をも指し、それゆえに少数民族や山村も周縁と目されるものであり、毎年、年度人物においてもこれが体現されている。今までの年度人物には少数民族の人々も以下の通り含まれている。まず、地震で家族 5 人亡くなったにも関わらず、群衆を率いて救援活動を続ける新疆ウイグル自治区チョンクルチャク郷 6 大隊の村党支部書記ダウティ・アシム氏である。そして、同じく新疆ウイグル自治区の民族孤児の母、アリパ・アリマホン氏と、青海省玉樹チベット族自治州のカム地区の男性ツアイワー氏である。また、僻地社会に貢献したとされる物は以下の通り

である。貴州の山深く一人で支援教育を行っている大学生の徐本禹氏、重慶市北碚区柳蔭鎮の郷村医師周月華氏、艾起氏夫婦、四川省涼山イ（彝）族自治州馬班郵路[‡]の郵便配達員王順友氏、涼山イ族自治州懸崖小学校の支援教師李桂林氏、陸建芬夫婦、26 年間にわたり滇池の環境を自発的に守る張正祥氏、チベット自治区で 12 年間支援教育を行った胡忠氏、謝曉君氏夫婦、四川涼山ハンセン病患者が集まる村の教育事業に身を投じる台湾同胞張平宜氏、南沙諸島で 97 ヶ月歩哨に立つ軍人の李文波氏である。『感動中国』は国家のメディア・ツールの力を借りて時空の境界を打ち壊し、同じ時間に異なる空間に置かれている多様な身分的特性を有する成員を集合させ、少数民族や後進的地域を社会的中心であるエリート層と並べ置いて提示し、一方では民族国家の境界を改めて言明し、同時にまた周縁が中心へ向かう求心力を増加させ、民族国家アイデンティティを再生産するのである。

二、感動を身につける—自然感情の国家化

この番組の中心人物に選ばれると、ただ意識形態の標準に達しただけではまだ不充分である。キーポイントは人の感情の需要に迎合できること、人に「感動」させることができることである。感動とは何なのか？いかに人を感動させることができるのか？これはおそらく番組制作者の企みにおける核心問題である。

まず、大衆の目を引いて、一定の視聴層を形成することが必要である。『感動中国』は過去の業績説明式の報道形式を払拭し、物語を語るという形式で、人物の経験と出来事の細部に注目している。こういう細部の拡大はある程度、政治に伴う堅苦しさを緩和し、「パパラッチ」の「ゴシップ」感を増やし、儀式をさらに可視的で、また「やじ馬見物」的にした。では、人の目を引いた後、どうやって人を感動させるのか。心理的原動力因子から言うと、感動は崇拜や敬慕とは異なり、大きな業績自身が人を感動させられるわけではなく、人を感動させるものとは辛苦や忍従、犠牲あるいはある程度の諦観であり、相対的に志を喚起させる「硬力量（強い力）」、感動は「ソフトな軟力量（弱い力）」である（朱龔星、2012）。このような情緒を我々は「自然感動」と呼ぶ。それゆえに典型的なイメージは、一般人の生活の「ソフト」な一面として現われる時のみ、最も人の心を捕えることができるので、要点となるのはいかにこうした生活の中の人を感動させる要素を掘り出し、パッキングするということなのである。

その年度人物が成功を得るまで追及し、努力をし、粘り続ける過程に多くの場合、自身の身体の酷使や家族への粗忽、清貧や孤独を甘受すること、外部からの圧力を耐え忍ぶことなどが伴っている。また老年、柔弱、疾病、死亡、別離、孤独は感動から最も身近に発生する自然な出来事であり、極めて容易に人々の感情に共鳴を起こすものであり、これがストーリーの最高潮部であり、感動の頂点なのである。年齢、性別、身体等の自然要素と社会的成功が結びつくと、極めて容易に誇大に感情を煽る効果を生み出す。例えば、人々に尊敬されている医学専門家の呉孟超氏の VTR には、最初は呉氏が患者さんのために靴をベッドの前に置くシーンである。90 歳の白髪の医学専門家が患者のために靴を置く行為は、普通の老人が行っても人を感動させる。そこに呉氏の社会的地位——医学専門家、を加えれば、以上の自然な感動をさらに拡大する効果が生じる（何昊 2012）。また日中戦争中細菌戦で被害を受け

[‡] 中国四川省涼山彝族自治州で、車の通らない地域に対して馬に郵便物を載せて配達する方法。（訳者注）

た中国人被害者の訴訟原告団団長の王選氏を紹介する VTR によく出てくるシーンは王氏が一人で歩く姿である。それは王氏の終わりの見えない訴訟の道をも意味している。王氏の事例は大きなギャップを作ってきた。それは、歴史的事実と民族的名誉にかかわる重い使命を一人の女性が背負っているということである。責任の重さと女性一人の弱さ、困難な道と王氏の忍耐強さ、こうしたギャップはまさに人を感動させるものである。馬班郵路の郵便配達員王順友氏もいい例である。馬と一緒に山を通る夜、一人でたき火の近くに座り、お酒を飲みながら、メロディーにならない歌を歌う。広々としている山の中、ただその歌が響いている。こうしたシーンは人を感動させやすいセリフも加わって、「孤独は彼の生活の常態で、14、5日の間に自分の歌とそれ馬としかコミュニケーションができない。」「20年間、毎年少なくとも330日も一人で孤独で荒涼な山を歩く。20年間に歩いた26万キロとは長征路を21回も歩くこともできる距離であり、また地球を6回半まわることもできる。20年間、王氏は一回も配達を遅らせたこともないし、郵便物一つ紛失したこともなく、配達正確率は100%である。」(周建華、2007)

2002～2012年11期の『感動中国』の中で、物故者や、重病を患いながら最後の最後まで仕事を続ける人、人の財産や生命を救い出すために献身を行う人、あるいは危機に際して自己を犠牲にして人を救う人、またすでに逝去している著名な人物が16名もいた。死は人生における不可逆的な終局の事件として、人の感情をかき立てる上で、最も重みのあるものである。こうした物故者の表彰者については、往々にしてその親や仲間を招いて本人出演を行い、彼らは自分の物故者に対する感情を言葉で表現し、声や情調、涙たっぷりの場面は視聴者を感動させる最も効果のある触媒である。

このような自然感動と人物の社会的成功とが付与される国家言説が結びつくとき、「ソフトな軟力量」により生産される感動と広大な大叙事詩が招く感染が共に織りなされ、ともに分かちがたく、感動の国家化の過程はたとえ無意識的であっても当然ながら完成するのである。こうした感動はもはや個体のマクロな感覚ではなく、英雄的人物の主体性は組織が同意するある精神的表象へと転化することに成功しており、完全な国家、完全な民族に属するという一種の群集心理となり、国民に普遍的アイデンティティを与える一種の価値判断なのである。

三、隠退していく国家

たとえ本質が政治儀式であっても、『感動中国』は表現形式上は出来る限り政治的色彩を下げており、これがもちろんのこと視聴者に親近感を与えるのである。番組の推薦委員会は各分野の有名人から構成されており、彼らに共通する特徴は教育水準と知名度が比較的に高く、社会影響力が強いということである。また、職業や専門の分野は比較的幅広い。このようにそれを明らかにすることでメディアとしての権威性と代表性示され、同時に彼らが非公務員であることから政治から独立した「民間の声」であることを強調する(莫継巖、2012)。実際には、これらは「輿論指導者」として民族国家の社会的エリートとその代弁者なのである。このほかにも、年度人物を推薦する時の文章も彼らが執筆する。推薦と表彰の言辞は一種の文学的構造(周建華、2007)や文学的優美さ、洗練された言葉、重厚な文学的表現を採用し、政治言説上の「上綱上線(高邁な議論に依る針小棒大な批判)」の特徴から何とか免れて、人々を深く感動させる精神と芸術の共演に変わってきた。表彰については、以前は公

的機関が榮譽を授与していた形式を改定し、小学生が表彰する方法で落ち着いた。感動を基準として選出された人物はいかなる機関や個人に表彰されてもいかにも時宜に合っておらず、いっそのこと、純真と希望を表象する小学生によって表彰が行われることで常套を脱することができるのであり、さらに「小さなお友達」を賞杯と花束の贈呈者にすることで、観衆が感じるのは、ただの表彰という一事だけではなく、国家の希望まで感受し、このように人を感動させる組み合わせも民族精神の拡大と永続を表彰している。

十数年の歴史のなかで、『感動中国』も時代と共に歩んできた。総じて言えば、基準は次第に寛容になり、視点もマクロになり始め、年度人物となるべき人物の身分の特徴も変化が生じている。最初の数回の『感動中国』ではやはり功績の広大さを主として、突出していたのは幹部や軍人、医者、知識人、模範的労働者や文化・スポーツのスターなどの「大人物」および彼らが国家のために行った「大偉業」であった。2004 年、腎臓を母親に捧げた現代の孝子である田世国と、山奥深くで一人で支援教育を行う大学生の徐本禹氏が表彰され、番組に変化が現われ、こうした「小人物」も感動の舞台に引き出されたのである。我々は小人物を「目立った身分にない一般人で社会的に貢献した人物、あるいは日常生活中でたゆまぬ努力で中国人のすぐれた伝統と伝統の美德を体現した人物」と定義する。2005 年に、このような「小人物」がさらに増えてきた。3 回も河に飛び降り、人命を救助した河南省の青年・魏青剛氏、山の中の最後の徒医者李春燕氏、妹をつれて大学に通う洪戦輝氏、37 年間約束を守る上海の知青[§]陳健氏、涼山イ族自治州馬班郵路の郵便配達員王順友氏、青蔵鉄路の建設者などである。筆者が 12 回の『感動中国』の中の小人物の統計(表 1)をとったところ、2005 年、2009 年、2011 年、2012 年の「小人物」の人数が、その年度全体の年度人物の過半数を占めていることがわかった。

もし農村で支援教育をする徐本禹氏、山の中の徒医者李春燕氏、26 年間滇池の環境を自発的に守る張正祥氏、馬班郵路の郵便配達員王順友氏、留守児童^{**}のために学校を作る女子大生李灵氏などの例を、「愛国敬業奉獻堅守」の「齒車」的な精神の代表とすれば、腎臓を捧げて母を救った田世国氏、肝臓を分けて子供を救った陳玉蓉氏、妹を連れて大学に通う洪戦輝氏、約束を遵守する陳健氏、妻を携えて初恋の女性の世話を焼く韓惠民氏、志高い身障者少年の黃舸氏などの「小人物」は個人的な出来事に属し、さらに個人や家庭、友情、愛情などの範囲を出ておらず、これらは「個人的出来事」により国家の舞台へと上った人物であり国家が関与する範囲が弱化したように見えるが、その背後には一定の社会的背景があり、実際には国家価値の指向を隠れた形で示す方法なのである。

[§] 知青：特に文化大革命中には都市の初級・高級中学の卒業生を指し、彼らは辺鄙な農村を支援するために動員され、そこに住みついた人々。(訳者注)

^{**} 留守児童：近年中国社会に現れてきた社会現象の一つである。中国近代化の発展に伴い、農村の労働力が都市に移動し、その子供が農村に残り、親と離れて生活する現象である。(訳者注)

表 1

年度	小人物					
	社会貢献		自強不息、伝統的美徳			
	人数	割合	人数	割合	合計	割合
2002	0	0	0	0	0	0
2003	0	0	0	0	0	0
2004	1	1/11	1	1/11	2	2/11
2005	4	4/11	3	3/11	7	7/11
2006	2	1/11	1	1/11	3	3/11
2007	0	0	3	3/11	3	3/11
2008	2	2/10	1	1/10	3	3/10
2009	4	4/11	2	2/11	6	6/11
2010	2	2/13	2	2/13	4	4/13
2011	5	5/11	2	2/11	7	7/11
2012	4	4/11	2	2/11	6	6/11

改革開放後、中国社会は物質生活の面で大きな発展を収めたが、生活の急速な変化は、価値体系を以前のそれとは大きな隔たりのあるものへと変え、そして、いかに共通認識を作り出し、良好な社会秩序を維持するかは為政者が解決すべき問題なのである。ある種の道徳と観念上の共通認識は、国民の素質の養成、社会的統合性に対して重要なものである。こうした一種の社会資本は、ただ宗教や文化伝統から提供され得るものである（陳明、2007）。伝統価値体系は中華民族の財産であり、また極めて民衆を動員しやすい歴史的資源であり、「忠」「信」「篤」「敬」「義」に代表される伝統的美徳は世を救う一種の良薬となる。これらの社会問題が次第に耳目を集めるようになり、義務教育の困窮、義を見て勇氣ある行動をすることへの躊躇、誠信質朴の欠如、親愛の情の希薄化など、こうした問題の解決において、手本となる小人物は非常に人々を感動させやすい。彼らは平凡な一般人であり、ときには一種の卑近な存在であり、日常生活に近いものであり、現実的に近付ける能力であり、深く知ることによって直接的に人々の内面に届き、教化作用をもたらすのである。ゆえに、『中国感動』は国家のために巧妙にその意識形態を植え込み充分な弾性を持つ空間を提供し、草の根の英雄人物の表彰の背後には、依然として、国家意識形態の「影」が見えるのである。他の人の家庭の話を見聞きする時、巧妙な方法で、ひそかに国家が仕向ける使命を完成させるのである。

現代社会において、人の感情は次第に外部の社会的力（組織、権力、資本）による統制下に置かれるようになる。それと同時に、感情表情が次第にシンボルリックになり、感情の伝達はますますマスメディアに主導され、単一方向の形式になっている。それも権力集団に利用されやすくなった（王寧、2000）。伝統的な宣伝形式が衰微する状況にあって、国家意識形態は表現形態の刷新の導入を模索し、『感動中国』はまさに最も身体化、感覚化、親密化の方式を採用し、放送と浸透性と高い発信力を実現する。また、構築されたひとつの儀式的

な情景により、普段は潜在し、散在する感情を儀式という具体的時空の中で、引き起こされた感覚は容易に高揚した情緒的爆発へと転化し、このような爆発が強烈に艱難辛苦や生死の克服と感情の共鳴へと昇華させ、不断に、社区（コミュニティ）や国家、民族の集団への理想とアイデンティティを引き起こし、社会的動員の名目となるのである。

参考文献

- 李朝陽、2010、「「春晚」の身分決定と機能？」、『深討と争鳴』第5号。
- 陳蘊倩、2008、「謁陵儀式と民国政治文化」、『開放時代』第6号。
- ギアツ、クリフォード、1999、『ヌガラ：19世紀バリの劇場国家』、趙丙祥訳、上海人民出版社。
- 莫繼巖、麦尚文、2012、「ニュース儀礼、公衆の性格、国家の記号：『感動中国』の影響力が生む機能の分析」、『テレビ研究』第5号。
- 朱龔星、「『感動中国』から見る新時代の典型的人物の選択と報道」、『中国記者』第5号。
- 何昊、張兵、2012、「感動の力を探す：『感動中国』2011年度人物受賞パーティー制作談」、『テレビ研究』第4号。
- 周建華、2007、「精神と芸術の宴を創り出す：『感動中国』年度人物受賞儀礼の文学的修辭の分析」、『ニュース・ファン』第3号。
- 莫繼巖、2012、「大型テレビ番組制作と社会資源開発の道筋：CCTV『感動中国』記事を事例として」、『ニュース知識』第1号。
- 陳明、2007、「公民宗教儀礼」、『原道』第14号。
- 王寧、2000、「感情を略論する社会的方法：感情社会学研究ノート」、『社会学研究』第5号。

（翻訳者注：上記では、中国語文献も名称等を和訳してある。原題等は中文論文を参照）

（翻訳：中山大将、巫靚）